

氏名(本籍)	かわむらまさゆき 河村正之 (山口県)
学位の種類	学術博士
学位記番号	博美第6号
学位授与年月日	昭和62年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当 美術研究科美術専攻油画研究領域
学位論文等題目	(論文) 「メッセージのゆらぎ」 (作品) 「水のない谷間」 他12点
論文等審査委員	(主査) 東京芸術大学 教授(美術学部) 芸術学士 田口 安男 (副査) " " (") " 山川 武 (") " " (") " 坂本 一道 (") " " (") " 佐々木英也 (") " 助教授(") 芸術学修士 榎倉 康二

論文内容の要旨

本論文は、「第Ⅰ部・作品編」と「第Ⅱ部・論攷編」から成る。

第Ⅰ部では、作者が1983年から1986年にかけて制作した博士論文の対象作品15点と、論攷編を補足する作品10点の写真が掲載され、東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程における創作研究とその成果のあらましが示される。なお、それぞれの作品には素材その他のデータが付け加えられている。

これらの作品は、具体的な事物を説明する再現性から独立することを目指して制作されたものである。そこでは、他の何物にも似ない斑点やしみのような形象や、幾何学的形象、時には象徴的な幾つかの形象が多様に組み合わせられている。すなわち、それらは作者と絵画の関係を一般的に考えられているような固定した結び付きから解きはなつて、互いにくゆらぎ>あうものとして再編しようとする意図に基づいて描かれているのである。また、それらの作品はテンペラと油彩の併用の研究を踏まえながら、絵画を広く、より自由に捉えようとしているものである。

第Ⅱ部に掲載された論攷「メッセージのゆらぎ」は、多様な価値観が共存しあう現代における絵画の<作者としての私>の位置・役割を様々な角度から考察することによって、今日における絵画の可能性を探ったものである。その構成は次のように序論・本文3章・結語から成る。

序論「目的と方法」では、表現の前提である個人と世界の関係がゆらぎ始めた時から今日の絵画における変化が始まったとし、本論の目的とその研究の意義及び独自性について述べている。さらに、その方法について述べることを通して本論の方向付けが為される。

第1章「森をめぐる」では、その全体を通して、作者が自身の表現を模索してゆく過程を検証した。§1「個性のゆらぎ」では、作者におけるモチーフ＝テーマの不在の認識を契機として見いだされた〈しみ・にじみ・デカルコマニー〉などに内在する〈自然性・偶然性〉及び〈他者性・外部性〉と、作者の表現との関連が述べられる。それらは、ダダイズムや「もの派」を研究することによって見いだされたものである。その結果、それまで表現の主体と考えられてきた〈個人性〉としての〈個性〉は変容し、やがて自然性・偶然性及び他者性・外部性と作者の個人性とが流通しあう場としての〈コスモスとしての私〉という領域が導き出され、そして〈コスモスとしての個性〉という概念が提唱された。

§2「方法のゆらぎ」では、卵黄をメディウムとする〈黄金背景テンペラ〉と出会うことによって、作者と絵画の間に諸要素の流通・拡大をもたらす〈方法のゆらぎ〉が形成される過程が述べられている。この問題は、宗達派の《鶯の細道図屏風》や曾我蕭白の《群仙図屏風》といった伝統的作例を検証することを通じても検討された。さらに、〈樹脂テンペラ〉を採用し、油彩との併用を試みることによって、新たに非再現的形象を〈うねり〉として画面に導き入れることが可能になった。その結果、画面は絵画が生成する場となるに至り、その延長上に画面の大型化あるいは画面設定の多様化がもたらされたのである。

さらに、このような展開の深層に横たわるダダイズムや「もの派」からの影響を踏まえて、絵画という形式そのものに対する検討を加えた。すなわち、インスタレーションやパフォーマンスといった表現の特性を〈対世界直接性〉として措定し、それらにおける時間性を検討することによって、観客が作品を経験することの問題に踏み込んだのである。かくして、今日における絵画の有効性を確認すると同時に、作者の立場を〈世界内フィルター〉として規定するのである。

第2章「《水の無い谷間》」では、第1章で見た個性と方法の〈ゆらぎ〉が具体的に検証される。そこでは、作品《水の無い谷間》の制作過程を整理しながら辿り直し、改めてこの画面世界の意味を読み取ろうと試みている。その結果、画面上に現れたのは、現実世界の事物性とも作者の個人性とも異なる、一種のメッセージ性として機能しうる新たな世界性であると結論付けている。

第3章「技法をめぐる」では、制作時期を三つに区分した上で、作者の制作を支える素材・

技法について述べている。そして、制作と素材・技法との関係を緊張をはらんだ協調関係として捉え、〈素材・技法〉は〈方法のゆらぎ〉を通じて〈個性のゆらぎ〉に呼応し、それらの全体を包括する〈絵画のゆらぎ〉へと収斂されてゆくことが示される。

結語では本論攷の筋道が整理され、〈ゆらぎ〉を媒介項として〈個性〉・〈方法〉・〈素材・技法〉をめぐる円環が成立することを述べている。さらに、この円環が絵画を画家の感性の惰性的制度化から救うものとして要約された。

なお、本論文中で言及した参考例を補足する意味で、参考図版を添付した。